葛飾図書館
友の会通信

第10号
2010年12月1日（水）
葛飾図書館友の会
編集　広報委員会
発行責任者 中里　隆二

中央図書館開館１周年記念《友の会ウィーク》を開催
11 団体が多彩なプログラムで祝う

11月上旬に開催された中央図書館開館1周年記念《友の会ウィーク》。当会の4委員会と当会会員が所属している7活動団体の計11団体が、講演会、読書会、映画会、演劇、パネルシアター、紙芝居、おはなし会など多彩なプログラムを繰り広げました。

プロレスと図書館が出会った午後　岡村正史氏の１２０分白熱トーク炸裂！

なかでも13日の「トークライブ・スペシャル」第3回＜図書館資料で探ったプロレスの世界＞『プロレスと日本人～力道山・馬場・猪木とは何だったのか』はとりわけ注目を集めた。講師は、『知的プロレス論のすすめ』（エスエル出版会）、『力道山』（ミネルヴァ書房）などの著作で知られるプロレス研究家・人間科学博士（大阪大学）の岡村正史氏である。氏は、今日までの自身とプロレス界の歩み、背景となった世相の移り変わりを重ね合わせながら、闊達な語り口でトークを展開。長年の観戦歴をベースに、ファン・マニア・批評家・研究者の4層を自身のうちに蓄積してきた氏ならではの示唆に富むコメントを次々に炸裂させ、プロレスの広くて奥深い魅力を明快に説いていった。「プロレスの送り手は意外に冷めているのに対して、受け手の多くはとことん熱い」との岡村氏の指摘通り、熱心に耳を傾ける60人近くの参加者が図書館で日頃開かれる講演会とはおもむきを異にする独特の空気を白熱させる中、予定の120分はまたたく間に過ぎた。

“図書館だからできる”　特集展示の試み

併せて企画されたのが、特集展示『プロレスを知る・楽しむ・考える本』（12月上旬まで）。館内「かつしかコーナー」の一角に、岡村氏の著作と氏が選んだ40冊を中心とする関連資料を集め、再認識・再発見の場を提供した。“40冊”に対する岡村氏の寸評付きのブックリストの配布も実現し、“図書館だからこそ可能な”コーナーづくりへの最大限の試みとなった。

「プロレスみたいな」という形容が良くも悪くも通用するジャンルでありながら、その位置づけはあいまいで、誤解や偏見をもたれやすい一面をもつプロレスに対しては、どこの図書館でも選書等に苦慮せざるをえなかった感は否めない。

全国的にもおそらく例をみない今回のイベントによって、少なくとも葛飾区では、プロレスと図書館が史上初めて真正面からの出会いを果したといえるのではないだろうか。　（イベント委員会）

はじめての単独おはなし会　『おはなしくらぶ』が誕生

今年の６月から月１度中央図書館のおはなし会に参加してきた児童・ＹＡサービス応援委員会。このウィークで、初めて単独でのおはなし会が実現しました。経験の浅い私たちにとって、ちょっとしたチャレンジでした。プログラムを決めることも、チラシやポスターを作ることも、必要なものを手配することも、緊張しながら進めていきました。企画の１日目は、秋晴れの１１月６日土曜の午後。「おはなしのへや」に、20 人ほどの親子が集まってくれました。担当するメンバーは、進行が初めてという２人。不安と緊張を隠して３つの演目をよどみなく（？）こなし、約 20 分のおはなし会は無事終了。好評だったのは、新聞紙を折ったりちぎったりし、花や船やＴシャツなどを作りながら進めるおはなし。

２日目の日曜日は、午前中ということもあり少人数でしたが、指人形を使ったわらべうたが子どもたちの心をつかみ、続く絵本とおはなしも楽しんでもらえました。メンバーの１人が、１歳のお子さんを抱っこして絵本を読む姿がとてもほほえましく、印象的でした。

友の会ウィークを機に、「おはなしくらぶ」という名称も決まった私たち。船出したばかりですが、学習と経験を積んで、子どもたちにたくさんのおはなしを届けていきます。　（児童・ＹＡサービス応援委員会）

第２回ナイトセミナー　『社会人のためのマスコミ記事と広告の読み方』

中央図書館の開館１周年記念「友の会ウィーク」のイベントとして、１１月１日（月）に第２回ナイトセミナーを開きました。始めに川島イベント委員長から、この講演会が成人を対象とした「生涯学習塾」であり大人のための教養講座であるという紹介がありました。講演の要旨は以下の通りです。

新聞、雑誌、テレビ、インターネットなど私たちの身の周りには膨大な情報が氾濫しています。情報リテラシーが足りない執筆者による推論の誤りもあれば、いかにも誤解しそうな広告もあります。講演会では真偽入り混じったコンテンツに惑わされない読解術をクイズ形式で楽しんでいただきました。とりあげた素材は、新聞記事、テレビの報道番組、広告表現、公共広報などです。

グラフのトリックに騙される、見かけの数字に騙される、もっともらしい論証に騙されるの３つにご用心、というのが講演の趣旨です。必要な姿勢は、氾濫する情報に対して速読と丸暗記で対応するのではなく「ゆっくり読む」こと、そして安易に信用しないことにつきます。

講演後、活発な質問やご意見を頂戴しました。熱心に参加してくださった皆様に感謝します。時間はプログラム通り７時に始めて８時に終了しましたが、もっと長くても良かったという反響をいただきました。最後に非会員の方々に対して、友の会への参加を呼び掛けて講演会を締めくくりました。

葛飾図書館友の会会長　首都大学東京客員教授　朝野熙彦

スペシャル版　『キーワード読書会（はは）』＆講演会

作家小中陽太郎氏を迎え、選んだ本を語り合う
“海の中に母がある”と著書も紹介

広報委員会によるイベントは１１月３日（水･祝）午後３時からの『キーワード読書会』。今回で４回目の読書会は、講演をお願いした作家の小中陽太郎氏を交えてのスペシャル企画。キーワードは講演にちなんで決定した「はは」。これまで通り参加者が本を持ち寄り、選んだ気持ちや内容などを熱く語りました。見学者は少なかった読書会でしたが、小中氏からも時折参加者への質問や説明をいただき、今回は１時間のため各人の持ち時間は５分という短かさ。語り足りない方もいたに違いありません。予定時間を大幅にオーバーして打ち切り（？）、会場を会議室１に移し、講演会が開かれました。

小中氏は神戸生まれの上海育ち。ＮＨＫのテレビディレクター、「ベ平連」の結成、金大中氏救出にも関わり、そして日本ペンクラブ理事でもあり、現在は大学教授。

生まれてからこれまでの活動を振り返りながら、『「ラメール母」と私』と題した講演内容は多岐にわたり、アットホームな雰囲気で進みました。

「ベ平連」時代の経験をもとにし、最近上演した“ロマンスと政治を一緒に”仕立てたミュージカルの一部をＤＶＤで披露しながら、平和と台風の間を生きてきた氏の話に引き込まれました。

講演はとどまるところ知らずで、最後に“海の中に母がある”、フランス語では「Ｌａ　Ｍｅｒｅ(母)のなかにＬａ　Ｍｅｒ(海)がある」と種明かしをしていただいた楽しい講演会でした。終了後“ご苦労さん会”でも盛り上がった半日になりました。

（広報委員会）

今回紹介された本　キーワード『はは』		
少将滋幹の母	谷崎潤一郎	中公文庫
飛ぶ教室	エーリヒ・ケストナー	岩波少年文庫
ピアニストその人生	園田高弘	春秋社
ありがとう―詩集―	サトウハチロー	日本図書センター
小石川の家（うち）	青木　玉	講談社
童話　金魚のお使い	与謝野晶子	和泉書院
カトリーヌ・ド・メディシス	O・ネーミ／H・ファースト	中公文庫

フィナーレはナイトシアター　上映作品は『断崖』

ファンの方々も増え、定着した毎月第２サタデーナイト

１１月 13 日（土）は友の会ウィークの最後を飾るナイトシアター。上映作品はヒッチコック監督のサスペンス『断崖』。ナイトシアターはこの日で 14 回目を迎えました。開場 30 分前にいらっしゃる方や毎回鑑賞される方もいて、今回は 40 名近くがスクリーンの前に座られるなど、だんだん認知度が高まっています。

第１回は中央図書館開館直後の昨年 10 月の『大菩薩峠』で、その後毎月開催し、現在は第２土曜日の夜に開催日を固定し、邦画と洋画を交互に上映。ナイトシアター委員会が来場者のアンケート結果も反映しながら上映タイトルを決定しています。

当初苦労したＤＶＤの操作にも、今は慣れてきた委員が手際よく準備したり、映画に関する図書館所蔵の書籍などを収集・陳列するなどの工夫を続けています。本年２月の『おくりびと』には 80 名を超える人が観に来られています。既に来年 3 月までのラインナップは決定しており、次回以降は『真空地帯』『エルミタージュ幻想』『いつか読書する日』と続く予定です。　（ナイトシアター委員会）

「北区図書館活動区民の会」が中央図書館に来館

“区民協働型図書館” の理念のもとで活動
「友の会」と意見を交換、交流を行う

１１月９日（火）午後、「北区図書館活動区民の会」の皆さんが中央図書館の見学と葛飾図書館友の会との交流に来訪されました。図書館員5名を含め20名近くの団体です。中央図書館の職員から開館までの経緯と1周年を迎えた図書館の特徴などの説明を受けた後、約1時間かけて館内を一周されました。「区民の会」からは書棚が低くて見通しもよく、システム化も進み、オープンな感じが素敵だとの感想がありました。

４つの部が活動、図書館内に事務局もある
非営利団体としての組織

その後、当会との交流会があり、「区民の会」会長から平成19年10月に非営利団体として設立され、正会員（個人千円・団体2千円の年会費）と賛助会員（年会費1口2千円以上）、それに登録会員（会費や総会での議決権や役員資格なし）で構成されていること、そして北区中央図書館（愛称は“赤レンガ図書館”）の区民コーナーに事務局を持っており、スタッフも常駐していること、現在個人60名、団体20が活動していることなどの紹介がありました。

「区民の会」は企画･広報部、子ども部、ユニバーサル部（障がい者や高齢者へのサービスを行う）、そして地域資料部の4つの部があります。区民と行政が一緒に考え、創っていく“協働型図書館”の理念のもとで活動しており、図書館と部会で相互に意見を交換し、主な活動は図書館からの受託事業として行っているという、当会の性格とは少々異なった組織のようでしたが、今後も相互に交流を深めていくことを約束し、意見交換は予定時間をオーバーして終了しました。

心にのこる私の一冊 ⑥　『黄色い本－ジャック・チボーという名の友人－』

著者 高野文子　講談社　２００２年刊

加藤　和也

今回私が紹介したい本は、「黄色い本」です。本と言いつつも実は漫画です。おそらくみなさんが紹介する本が、小説や評論などが多いかと思いまして、趣向を変えてみたいと思い選びました。

しかし、全く本と関係ないかと言うとそうではありません。このお話は主人公の女子高生、田家実地子がロジェ・マルタン・デュ・ガールの「チボー家の人々」を読むお話です。

著者の高野文子さんといえば、複雑なアングルで描くことなどで知られています。この漫画でも、その構図やコマ割の見事さがいかんなく発揮され、第７回手塚治虫文化賞マンガ大賞を受賞されています。しかしそれ以上にこの作品は読書というものを非常によくとらえています。

よく良い読書は本の世界に入り込むということが言われます。この本でも田家実地子はジャック・チボーのすぐ後ろを歩いたり、菩提樹の陰からやりとりを聞いていたりします。それと同じように、ジャック・チボーもまた田家実地子の世界に入り込んでいます。料理を作っている時や、夜１人で雪道を帰る途中などにこの本の世界が、生き生きと田家実地子の世界に現れてきます。この作品の素晴らしいところは、私から本の世界への一方通行ではなく、本の世界から私の世界への関わりが、何の違和感もなく表現されていることです。意外とこの相互関係を表現している作品は、漫画にせよ小説にせよ少ないように感じます。私もやはり自分の好きな本のキャラクターが自分の世界にいるような想像をすることがあります。

最後、主人公は卒業と合わせて、この本を読み終えます。エピローグを読み終えるシーンは感動的です。まさしく卒業で友達と別れるように、ジャック・チボーという名の友人ともお別れしなくてはなりません。

稚拙な紹介文ですが、もし少しでも気になる方がいらしたら、葛飾区の図書館に所蔵していますので、是非ご予約ください。

（かとう・かずや　ナイトシアター委員長）

「葛飾図書館友の会」で一緒に活動してみませんか！

『友の会』は多くの会員によって活動しています。図書館を利用されている方、活動趣旨に賛同される方々、是非ご入会いただいて、あなたの図書館に関わるいろいろなアイディアを少しずつ実現してみませんか？

毎月第３土曜日の午後１時から４時まで中央図書館内で、また従来通り友の会開催イベント時にも直接の入会受付を行っていますので、是非ご利用ください。年会費は一般会員は 1,000 円、賛助会員は１口 2,000 円です。上記の方法が利用できない場合、入会希望者は中央図書館に入会届をご提出の上、年会費を下記の口座に納入してください。図書館での年会費の直接納入はできません。「通信欄」に一般あるいは賛助会員かを明記の上、２２年度年会費とご記入下さい。振替手数料は銀行窓口では 120 円、ＡＴＭからでは 80 円です。恐れ入りますが、ご負担をお願いいたします。

ゆうちょ銀行	口座番号	00100-7-392065
	口座名称	葛飾図書館友の会

●問い合わせ・連絡先　中央図書館担当者（玉川さん、吉村さん、清水さん、白井さん）TEL 03-3607-9201

色えんぴつ

このコラムのタイトル「いろえんぴつ」についてはいろいろな謎解きもあると思いますが、今回はぼくの考えを一席述べたいと思います▼三十代で百貨店の宣伝部から新聞社に途中入社し、初めてテレビ、ラジオを含むマスコミ業界の中枢にふれ、まっこと面食らうことばかりでありました▼取材、編集、校閲、印刷、営業、広告、出版など各部門の説明を受け、想像以上の現場の厳しさと実情を体感。まずは広告を含む事業の責任者となって特急列車に乗った感じの忙しさのなか、初めて校閲部門の権威というものも知りました▼この部門のしごとは回送されたゲラ刷りを睨んでこめかみにしわをよせ赤鉛筆を耳に青鉛筆を指に構えてよみにくい字づらをなぞりながら一行一行に傍線を引き、誤字、脱字、誤植を発見して赤字を入れる真剣勝負です▼青の傍線は責任の所在を示す権威の軌跡▼雑誌、書籍などの校正とは違う時間の勝負。現場は戦場の騒ぎの中、黙々と進める校閲係の神技にいつも感謝していました▼ぼくの「いろえんぴつ」はこの校閲の赤と青のタップダンスに支えられながら懸命に仕事に没入していた若き日の思い出なのです。

（高橋友の会副委員長）